

学習者の成長過程を見通した J・F・F・ブルクミュラー・25の練習曲のピアノ指導法

A teaching method for 25 etudes of J・F・F・
Burgmüller with prospect of the learner's growth process

竹内京子
Kyoko TAKEUCHI

キーワード：ピアノ指導法、ブルクミュラー、練習曲

I. はじめに

筆者が担当する実務基礎Ⅶ（ピアノ指導者講座）においては、毎年必ずJ・F・F・ブルクミュラー作曲『25の練習曲集 Op.100』の指導法の講義を行っている。理由は、ピアノを学ぶ誰もが一度は手に取る可能性の高い曲集であることから、ピアノ指導者を目指す学生にとって、当該作品を通してピアノ指導法を学修することが重要であると考えられるためである。本曲集は、練習曲のカテゴリーであることを忘れてしまうほどの珠玉の名曲ばかりで構成されている。静穏で美しい作品から、快速な流れや華々しい跳躍を有するもの、劇的な場面の展開で聴く人を惹きつける楽曲まで、その性格は多様に設定され、ピアノを学習する上で、音楽的にも技術的にも必要不可欠な要素で組成されている作品が揃っている。

練習曲でありながら、発表会などで演奏される作品としても需要が高く、課題曲をブルクミュラーの楽曲に特化したコンクールが全国展開され、出場者が多いと聞く。多数の出版社が絶え間なく校訂版を世に出している人気の曲集である（表1）。

作曲は1851年作曲者45歳の時とされ、バレエ音楽で成功を取めた作曲家としての才能と長年のピアノ教師としての経験が生かされた優れた作品として開花したと言えよう。

幼少期の学習者を想定していると考えられるが、前述したように、必要不可欠な要素で組成した結果、難しい技巧も多数含むことになった。作曲当時、ロマン派作曲家の活躍が華々しかった時期であり、一般家庭でもピアノ学習熱が高まって、それらの作品のエッセンスを抽出したような教則本の需要が急速に高まったことが、創作の動機と考えられる。

学習者は、自らの過去の学習だけが拠り所であるが、指導者は、それぞれの学習者のその後の成長過程を見据えて、各曲での学びのポイントを見定めて指導にあたるのが望ましい。すなわち、当該学習者が当該楽曲でどのような奏法、技術をどの程度までマスターしていれば、スムーズな成長を遂げることができるかを想定し、学習上の地図を描きながら指導にあたるのが、求められるということになる。本稿では、第1曲から第12曲までを取り上げ、学習者の成長過程を見通した指導法の例を示す。

*音楽学部音楽学科 (Department of Music, Faculty of Music)

表1 現在国内で入手可能なブルクミュラー25の練習曲関連の楽譜一覧（ヤマハミュージック倉敷店2017年10月調べ）

出版社	書名	校訂者等
ATN	レスナーのための指導のポイント ブルクミュラー25・18・12練習曲	田村宏著
kmp	ブルクミュラー25の練習曲/18の練習曲	佐野真澄
音楽之友社	25の練習曲 作品100	種田直之
音楽之友社	ピアノを学ぶ人へ贈る 武本京子の「イメージ奏法」によるワークブック『ブルクミュラー25の練習曲』	武本京子著
音楽之友社	ブルクミュラー25の練習曲 解説付	春畑セロリ解説
学研	びあのどリーむ ブルクミュラー25の練習曲	田丸信明編
学研	標準新版 ブルクミュラー25の練習曲	田丸信明監修
学研	新版 こどものブルクミュラー	田丸信明編
河合	ブルク25のポイント集中練習－ブルクミュラー・25の練習曲をきれいな音で弾くために	松田紗依
河合	ブルクミュラー・25の練習曲	井内澄子
河合	トレーニングオブアナリーゼ ブルクミュラー 25の練習曲編	鶴崎庚一著
教芸	ソナチネとブルクミュラー こどものためのベストセレクション	市川都志春
全音	こどものブルクミュラー	平野妙子編著
全音	ブルクミュラー25の練習曲 Op.100	北村智恵
全音	表現力がぐんぐん育つ！はじめてのイメージトレーニング 新こどものブルクミュラー	松本倫子
デプロ	ブルクミュラー25の練習曲	内藤雅子監修
ドレミ	ブルクミュラーのお国めぐり お話ピアノ連弾曲集 ～大人から子供まで楽しめる！～	後藤ミカ編
ドレミ	標準版 こどものブルクミュラー ブルクミュラー25の練習曲	ドレミ編集部編
ドレミ	こどものためのブルクミュラー<25の練習曲>	森本琢郎・池田恭子編
ドレミ	ドレミ・クラヴィア・アルバム ブルクミュラー25の練習曲	平尾妙子
ハンナ	ブルクミュラー25の練習曲 和声分析と奏法のアドバイス きれいに楽しく弾くために	六島礼子解説
東音企画	ブルクミュラー25の練習曲 徹底活用ガイド	
東音企画	ブルクミュラー25の練習曲 和音記号・コードネーム付	渡部由記子・石黒加須美・小倉郁子・二本柳奈津子・飯田有抄・上田泰史協力
東音企画	ブルクミュラー25の練習曲 100のレッスン・レシピ アンサンブル譜付	多喜靖美・松本裕子・菅谷詩織制作協力
ヤマハ	ブルクミュラー25の練習曲 ロマン派の作品の指導法	石黒加須美・石黒美有編著
ヤマハ	いわさきちひろ ブルクミュラー25の練習曲	手塚真人
ヤマハ	こどものブルクミュラー ミッキーといっしょ	ヤマハ編著
ヤマハ	ブルクミュラー25の練習曲<新標準版>	松本清
ヤマハ	ペーターズ社ライセンス版 ブルクミュラー 25の練習曲 作品100	

Ⅱ. 指導法および留意点

第1曲 La candeur すなおな心

究極のレガート奏法を習得するための楽曲と考えてよい。右手8分音符が4音のグループで下行する形が多用されているが、まず3度下行した後に2度ずつ下行（順次進行）する。この音型には、レガートという奏法の重要な学びの意味が込められていると筆者は考える。3度以上の隣接音程の場合、その音程を形成する2音が重なって同時に響き合っても濁らないが、2度音程においては、少しの重なりでも不快感を聴く者に与える。レガート奏法にも多様なグラデーションがあり、優れたピアニストは、前後に置かれた音符の関係性に依拠して弾き分けている。幼少期からその観点を持てるかどうかは、その後のピアノ学習の進捗に多大な影響を与えることは明らかである。『ツェルニー 四十番練習曲集第6番、第7番』を学習する際に、転びやすい16分音符の音型が上手く弾けることをイメージして指導にあたるとよい。

第2曲 Arabesque アラベスク

冒頭左手が奏する同和音連打において、三和音（重音）の打鍵のタイミングを完全一致させることは重要であるが、機能性の異なる3本の指が鍵盤を底まで同じスピードで下げることは元来難しい作業である。そこで、水平な底面を持つ直方体に均等に力が加わって鍵盤を押し下げることがイメージするとうまくいくようになる。鍵盤上に文庫本等を置き、その上に手指をアーチ型に構え、手首から先に下げて指先を最後に下げるイメージで、指同士を揃える感覚を養っていく。この動作を毎日繰り返すと、三和音が同時に鳴ることを実現させやすい。『ベートーヴェン作曲ピアノソナタ第1番』の冒頭部などの4分音符を行進のように毅然と刻む際の技術を向上させるのに有用だ。また、右手の16分音符4個と8分音符1個によるパッセージは、各指の第3関節の動きをよく意識して揃えることが肝要だ。打鍵と離鍵が鍵盤の1センチの深さの往復内で交替するイメージを持つと無駄な動きを減ずることが可能になる。

第3曲 Pastorale パストラール

『第1曲 La candeur すなおな心』では、3度2度2度と下行する音型が中心であったが、当該楽曲では、3度2度2度と上行するモチーフで開始した後、2度3度4度5度6度オクターブの音程が上行下行の多様な組み合わせとなって全曲に展開されている。指の選択や開閉の柔軟性に加えて、手首、腕、肘の移動を意識したポジション確認が自ずとなされる。よって、学習者がカンタービレ奏法に必要な技術を体得するのに最適な作品である。この延長線上に、『J・S・バッハ作曲インヴェンション第10番』『J・S・バッハ作曲平均律クラヴィーア曲集第1巻第13番』に見られる同類型の旋律がある。これらの作品は、書かれた内容に素直に従って弾いていけば、演奏者（学習者）を見事に正しい方向に誘導する点において、学習力を上げるために優れた作品といえる。

第4曲 Petite Reunion こどものパーティ

3度重音の音階の上行・下行およびその組み合わせで組成されている。『第2曲 Arabesque アラベスク』で述べたように、重音の打鍵タイミングの一致が課題となる。5・3、4・2、3・1と指使いを替えていくパターンと4・2ですべて統一する運指法があるのは周知のとおりである。将来的にはいずれの運指で奏しても遜色ない出来栄に仕上がることを目指すのがよいが、この時点では奏し易い方を選択するとよい。いずれの運指法にせよ、手首の程よい柔軟性と指関節のアーチ型設定の適切性が求められることに変わりはない。この奏法の延長線上に、『W.A.モーツァルト作曲トルコ行進曲』『ベートーヴェン作曲32の変奏曲WoO.80』等に見られる重音音型がある。

第5曲 Innocence むじゃき

拍ごとに返し縫いのような進路をとる音階から始まり、裏拍から表拍にかけてのスラーと、表拍に

付されるスタッカートによって、軽快さにより弾みが付き助長される中間部を有し、結尾部では、流暢で雄大な音階の下行および上行によって締め括られる。中間部左手の8分音符のトレモロは静かな支えになっていなければ目立たない存在であるが、1指が腕の重さの影響を直接受けると軽やかな主旋律の優美さを破壊することになる。『モーツァルト作曲ピアノソナタK.545第1楽章』の左手に頻繁に同型が現れる。

第6曲 Progres 前進

『第5曲Inocence むじゃき』において身につけたスムーズな運指の流れにのるかのように、本作品は開始される。16分音符から成る音階は、1オクターブに制限される代わりに8分音符による多様な音程の跳躍が彩を添え、生命力を与えている。特に、3度、4度、6度の多様性が特徴的である。ここで学んだことは、『ツェルニー三十番練習曲第18番』等のスケール系音型を流暢に奏するのに役立つ。

第7曲 Courant limpide 静かな小川の流れ

ピアニストにとって、10本の指がすべて完璧なコントロール下に置かれるのが理想であるが、最も制御し難い親指を自由にコントロールできるようになった時には、大抵の場合、他の指の動きも格段によくなっている。3連符と4分音符を兼ねた拍の頭は、さらさらと流れる小川のせせらぎが川底の突起した岩や石を水が越える際に描く美しい模様を表しているなど、風景を想像してみることは演奏に豊かな表情を添えるのに役立つ。『ショパン作曲エチュードOp.25-6』中間部で、右手1指が穏やか且つ毅然とした主旋律を描くのに似ている。後半の休符と音符の組み合わせから成る3連符の最終音Aを7小節間28回親指が受け持つ際、控えめにはあるが高音を支えなければならない。手首の回転動作（上下左右）と打鍵離鍵の組み合わせは絶妙なタイミングと鍵盤への適切な入力の方が求められる。『ショパン作曲バラード第3番』52小節目103小節目のC音、144小節目のAs音のオクターブの繰り返し、休符も交えて空気を循環させるように感じられることに酷似している。

第8曲 La gracieuse 優美

冒頭にmolto legato e leggiero と記されていることに注目したい。legato と leggieroのいずれか一方なら表現できるという奏者は珍しくないであろう。しかし、32分音符が多用されたモルデントのような音型において、legato とleggieroの両方とも実現することは容易でない。滑らかさと軽やかさが同じ音型内で同時に実現できた時に、初めて『La gracieuse 優美』に相応しい演奏と言えるであろう。本楽曲での取り組みは間違いなく、古典派ソナタ、ツェルニー練習曲に類出するモルデントの基礎固めになると断言してよい（『モーツァルト作曲ピアノソナタK.333終楽章』で旋律と一体となって魅力を増すように付されたモルデントなどが頭に浮かぶであろう）。ここで得る基礎力は、さらにロマン派作品の演奏につながる。例えば『ショパン作曲エチュードOp.25-2』の3小節目～6小節目の右手の音型のレガート奏法にも通じる。また本楽曲では、装飾音の後の締めくくりに跳躍する音型において、上行・下行の両方を練習することになるのが練習曲としての価値を高めている。9,10,13,14小節目で、左手用のヴァージョンも用意するという工夫があり、さらに練習曲の評価が上がっている。

第9曲 La chasse 狩

三和音は、本曲集の中の多くの作品で使われているが、本作品では8分の6拍子のアウフタクトから、同和音連打が8分音符と4分音符で奏されるため、自然に身体が動き出すかのような開始といった印象になる。狩りの合図の角笛を模しているのは明らかだ。序奏の後、5小節目からの左手の重音で高らかに歌い上げる主旋律の技法は、『ドビュッシー作曲ピアノのためによりプレリュード』の14小節目～38小節目、104小節目～114小節目の左手が担う主旋律の奏法を彷彿とさせる。右手が受け持つオクターブの連続では、『ツェルニー五十番練習曲の第7,20,35番』でさらに高度な技術、柔軟な動

きを体得できる。

第10曲 Tender fleur やさしい花

冒頭フレーズでは、3度3度4度3度の組み合わせで1オクターブを優しく駆け上がった後、2度3度3度と下行した後1オクターブ跳ね上がる。2番目のフレーズは6度上行後、3度4度3度2度3度3度の下行を続けてから1オクターブ跳ね上がる。アーティキュレーションスラーの後半が軽い音になることを活用して、上下行ともに柔らかで穏やかなうねりを持つ旋律に仕上がっている。3番目のフレーズは、順次進行（2度）が85%を占める滑らかさが前面に出た印象的な歌になっている。9小節目からが3部形式の中間部にあたるが、冒頭部で提示されたフレーズを切り分けて左右の手にモチーフを割り当てている。『クレメンティ作曲ソナチネOp.36-2』の主旋律にあるアーティキュレーションスラーを生かした奏法につながると考えられる。

第11曲 La bergeronnette せきれい

音同士が溶け合って実に易しそうに聴こえる一方で、演奏者にかかなりの緊張を強いるフレーズは数少ないものだが、本作品において、演奏者は冒頭からその洗礼を受けることになる。同じ種類の三和音が1拍ごとに転回形を変化させて両手で降りる。3度3度なら531と運指し、4度と3度の組み合わせになると521の運指に変わる。しかもそれが左右の手それぞれ別の拍上で行われる。鍵盤に注目すれば、鍵盤を一つ飛ばしにするのか二つ飛ばしにするかの違いである。奏した音をよく聴くことが最も大切と指導するのが標準的だが、ここでは、転回形の変化という理論を概ね理解させた上で「鍵盤をよく目視し、確認してから打鍵する」ことを意識させるべきだと考えられる。

第12曲 Adieu 別れ

4小節間の序奏の後に出現するインテンポで開始される練習曲らしいパッセージを美しく奏でられる力を獲得していれば、『モシユコフスキー 十五の練習曲集第6番へ長調』や『ショパンエチュードOp.25-2へ短調』の各指の打鍵離鍵のタイミング確立と手首と腕の柔軟性の絶妙な組み合わせが必要であることに奏者自らが気づくであろう。中間部の左手3連符の連続は、『ハイドン作曲ソナタHob. XVI:35第1楽章へ長調』や『ベートーヴェン作曲ソナタ第1番Op.2-1終楽章』等の急速な流れを容易にする。

Ⅲ. まとめ

このように各楽曲が練習曲として作曲されたポイントを眺めたとき、過不足のない構成の美しさや無類の美しい旋律や対旋律、場面の変化を見事に誘導する和音進行など、音楽が技術を誘導していることに気づく。今後、学習者が出会うであろう高度な技術を必要とする作品を深く確実に理解し、適切な取り組みが行える力をつけるためのヒントが多数提示されているのである。学習者がそのことに本当の意味で気付けるのは、おそらく次世代を指導する側に立つ程度の能力が身に付いた時であろう。いつの時代にも、指導者はブルクミュラーの創作の意図を着実に読み解き、学習者に伝える良い連鎖を形成していくべきと考え、その視点を授業内で着実に学生に伝えていきたい。

参考楽譜

- 1) ブルクミュラー・25の練習曲 カワイ出版
- 2) ツェルニー 四十番練習曲 全音楽譜出版社
- 3) BEETHOVEN Klaviersonaten BAND I G.HENLE VERLAG
- 4) J.S.BACH Inventionen Sinfonien G.HENLE VERLAG
- 5) J.S.BACH Das Wohltemperierte Klavier TEIL II G.HENLE VERLAG
- 6) MOZART Klaviersonaten BAND II G.HENLE VERLAG

- 7) ツェルニー 三十番練習曲 全音楽譜出版社
- 8) CHOPIN COMPLETE WORKES II STUDIES INSTYTUT FRYDERYKA CHOPINA POLSKIE
WYDAWNICTWO MUZYCZNE
- 9) CHOPIN COMPLETE WORKES III BALLADES INSTYTUT FRYDERYKA CHOPINA
POLSKIE WYDAWNICTWO MUZYCZNE
- 10) ドビュッシーピアノ曲集 音楽之友社
- 11) ツェルニー 五十番練習曲 全音楽譜出版社
- 12) ソナチネアルバム I 音楽之友社
- 13) モシユコフスキー 十五の練習曲 全音楽譜出版社
- 14) HAYDN Samtliche Klaviersonaten BAND II G.HENLE VERLAG